

英詩入門 —いろいろな詩の技法—

学芸学部 国際英語学科 武田 雅子

要旨：英詩への入門として、前回「いろいろな詩の形」としてまとめたが、今回はその続編として詩に用いられる技法を取り上げた。ここでは便宜上まず、音、形、比喩、単語の並び方、内容に分類し、音に関するものとして、頭韻とオノマトペ、形に関するものとして、繰り返し、言葉の使い方に関するものとして、同じ比喩の中の直喩と隠喩を対照して、さらに擬人法、単語の並び方に関するものとして撞着語法、内容に関するものとして、誇張法とそれに相対する控えめな表現、さらにアイロニーを、それぞれ実例と共に作品の中でどう生かされているか、鑑賞の際には何に注目すべきかを解説した。技法を通して、詩を読むこと、さらには文学作品を読むことの意味と楽しみも盛り込んだ。

キーワード：頭韻、オノマトペ、直喩、隠喩、アイロニー

1) 音に関する技法

alliteration (頭韻)

* ミッキー・マウスも Donald・ダックも
ディズニーのこの二人(二匹?)のキャラクターの名前、とてもリズムカルで覚えやすいと思いませんか。そこには、秘密があるのです。英語で書いてみると、それぞれ Mickey Mouse、Donald Duck なのですが、下線を施したように、同じMの音とDの音が使われていて、それで口調がよくなっています。アヒルの英語 duck に合わせて [d] で始まる名前がいくつかある中で Donald となったのですが、同じDで始まる名前は他にもいろいろあるので、もしかしたら Daniel Duck か David Duck だったのかもしれませんが。ネズミ (=mouse) のミッキー Mickey の彼女の名前も ミニー Minnie と M で始まっていますね。この技法は alliteration (頭韻) と呼ばれ、定義すれば「音頭の音節に同じ子音を置いて呼応させる」ということになります。詩人は表現の一つとしての音の響きに敏感なのですから、この技法を使わずに詩を書くことは少ないといっているほど、どの詩にも一箇所くらいは頭韻が見つかりますが、効果的に使われている例を見てみましょう。

* 頭韻のあるマザー・グース

こどものためのマザー・グースは、口調がいいことがポイントですから、頭韻も当然たくさん使われています。まず、登場人物の名前に、Simple Simon、Old

King Cole、Wee Willie Winkie (Wee は「小さな」という意味の語) など、この他にも数多く見られます。詩の中に使われている例として、次の詩の中で探してみましょう。

Monday's child is fair of face,
Tuesday's child is full of grace,
Wednesday's child is full of woe,
Thursday's child has far to go,
Friday's child is loving and giving,
Saturday's child works hard for a living,
And the child that is born on the Sabbath day
Is bonny and blithe, and good and gay.

月曜の子 きりょうよし
火曜の子 おじょうひん
水曜の子 なぜか悲しい
木曜の子 遠いところへ
金曜の子 とてもやさしくて
土曜の子 せつせとはたらく
そして安息日に生まれた日曜の子
明るくかわいく、りっぱでよい子
[河野一郎訳]

このマザー・グースの1篇は、まず「○曜の子……」という形を踏んでいること、脚韻がきっちり合っていること、2,3行目の full of の繰り返し、5行目の loving

と *giving* の音が合っていることなどが、覚えやすさの要因ですが、それに加えて、1行目の [f] *fair of face*、最終行の [b] *bonnie and blithe* と [g] *good and gay* の頭韻も一役買っています。音のまとまりは意味のまとまりにつながっています。さて、[b] の音はさらにその前の行に *born* があります。というより、むしろ逆で、この *born* の [b] の音に引きずられて、次行で [b] の頭韻が出てきて、さらに [b] の音が強調されることとなります。

* 神業のような頭韻

マザー・グースの場合は、頭韻や、最初に扱った脚韻などを使うことで口調のよさを目指し、そして歌い継がれてきたわけですが、詩人が書いた詩の場合、意味と形が見事に一致しています。つまり、頭韻も音のためだけでなく、意味の上でも働いているのです。Alfred Tennyson の次の作品は、短い中に鷺の峻厳な様を見事に捕らえています。音の上で様々な工夫が見られますが、まず、今回のテーマである頭韻を探してみましょう。

The Eagle

He clasps the crag with crooked hands;
Close to the sun in lonely lands,
Ringed with the azure world, he stands.

The wrinkled sea beneath him crawls;
He watches from his mountain walls,
And like a thunderbolt he falls.

鷺

鷺は曲がった指で巖頭を掴み、
寥々たる地にて太陽に近く、
碧天を背景にして佇立す。

さざなみ立つ海面は眼下に展がり、
山の絶壁から俯瞰するも、
忽ち雷のごとく急降下する。

[西前美巳訳]

頭韻のチェックに入る前に抑えておきたいのが、脚韻がきっちり合っていること、すなわち、一つ目のスタンザは全部まとめて [ændz]、二つ目のスタンザもまとめて [ɔ:ldz] で、各行が終わっているということです。

さて頭韻ですが、1行目の *clasps* と2行目の *close*、そして、1行目の *crag* と *crooked*、これはさらに4行目の *crawls* に続きます。こうして、[k] 音と [kr] 音は別にして、この [k] 音は、実は他に *crooked* や *wrinkled* にも隠れていて、この鋭い音がこのように4行目まで多用されることで、鷺が鋭い爪でごつごつした岩を掴んでいる様が音として聞こえるのですが、そうするとその光景は眼にも生き生きと浮かんできませんか。[k] 音の内 [l] は、*lonely lands* という頭韻となり、この滑らかな [l] 音が、きつい [k] 音と対照的な世界を作り上げています。[l] 音は *lonely* の中にも隠れていて、いっそう効果を増していますが、詩の後半では、*wrinkled*、*crawls*、*walls*、*like*、*thunderbolt*、*falls* と続いて、この詩の世界は、前半の [k] 音から後半の [l] 音へと移っていきます。中間には、*ringed*、*wrinkled* の [r] 音、他に [s] 音、[w] 音もありますが、最後の *thunderbolt* の最初の音である [θ] は、今までどこにも出ていなくて、突然出てきた感があり、それは突然鷺が急降下することと一致します。それにこの単語は一気に読まなくてはなりません。それまで、長母音や二重母音などがあってゆっくり発音されて波の動きの描写に身を委ねていたところ、突如動きが！——と、詩が急に閉じられます。音の効果のみを考えても、まだまだ触れていないところがあるのですが、それでも頭韻以外にも言及してしまいました。それは、こうしてこそいっそう頭韻の効果が納得されるだろうと思われたからです。音を別にしても、波の動きを *wrinkled* (皺が寄った) とか *crawls* (這う) と描写しているところもすばらしいところですが、あとは、難しい漢語 (とルビ) で雰囲気を表わそうとした訳の工夫もお見逃しなく。

* 頭韻がいっぱい

詩人は、このように音に敏感なので、頭韻でいっぱい詩を書くことも喜んでします。いえ、実はこの語はどうだろう、あれにしようかと苦しんでいるのかもしれませんが、でも、Algernon Charles Swinburne の次の詩などを見ると、詩人は苦しんでいるというより、白い蝶とたわむれるように音とたわむれて、やはり楽しんで書いているように思われます。さて、この詩にはどれだけ頭韻があるでしょうか。先ほどの詩でお分かりのように、頭韻は、その音が頭韻だけではなく、語の中で使われていてこそ、いっそう生きてくるので、頭韻以外にも注意してみてください。それから *fly* という単語は *butterflies* の中にも隠れていますよ。

White Butterflies

Fly, white butterflies, out to sea,
Frail, pale wings for the wind to try,
Small, white wings that we scarce can see,

Fly!

Some fly light as a laugh of glee,
Some fly soft as a long, low sigh;
All to the haven where each would be,

Fly!

白い蝶

飛べ、数知れぬ白い蝶、海のほうへ、
風を試す柔らかな薄い色の羽根、
小さく白く、かろうじて見えるかのような羽根、
飛べ！

喜びの笑いのように軽やかに飛ぶものあり、
長い低いため息のようにひそかに飛ぶものあり。
すべてはその居場所たるべき港へと、
飛べ！

* 日本語の頭韻は？

イギリスの作家Jane Austenの小説のタイトルの中には、*Sense and Sensibility*や *Pride and Prejudice* というのがあって、耳に残りやすく、作者が頭韻の効果を意識的に使っているのがわかります。後者は世界の十大小説に数えられたぐらい名作とされ、いくつか訳が出ていますが、タイトルは「高慢と偏見」、「自負と偏見」などと訳され、漢字2字ずつに合わせたところと、もとのが頭韻だからといっても日本語ではそのまま同じ音で始まる単語を持ってこられないので、「こうまん」と「へんけん」と音を合わせたところに、別の工夫をしたという訳者の努力が認められます。映画化された折には、「プライドと偏見」となっていて、これは意味の上での工夫は見られるものの、音の効果はゼロになってしまいました。

脚韻のときもそうでしたが、日本語では、揃いすぎた印象を与える、その他さまざまな理由があって、あまり同じ音をもってくるといことはしません。つまり、頭韻、脚韻は詩を作るときの大きな要素とはなっていないということです。でも、頭韻の例が全くないわけではありません。山頭火の俳句に「あざみ あざやかな あさの あめあがり」というのがあります。「あ」で合わせただけでなく、最初の2語は

「あざ」まで合っています。雨に濡れたアザミの鮮やかな色、澄んだ朝の空気が、音の弾みと共に読んでる者に伝わってきて、一度聞いただけでも覚えてしまえそうです。頭韻で見事にまとめた一句といえるでしょう。ただ、それだけに、ちょっとまとまりすぎているという感じもあります。この句はすばらしいけれど、どの句もどの句もこんな調子で音が合うと、短い俳句の場合、小さい世界にきゅっと固まってしまわないとも限りません。こんなところからも、日本語ではあまり頭韻や脚韻の技巧を凝らすということがないのでしょうか。

onomatopoeia (オノマトペ、擬音語・擬態語)

* 犬は本当にワンワン鳴くのか

「オノマトペ」とは聞き慣れない言葉ですが、日本語の訳は、上記のようにあるものの、「擬音語」と「擬態語」の二つをまとめて表す日本語がないために、カタカナで「オノマトペ」と呼ばざるをえないのです。この言葉自体はなじみがないかもしれませんが、実は日本語はオノマトペの能力がとても高い言語です。それに、自分でオノマトペを作ることも出来ます。では、どんなものなのか、まず「擬音語」のほうから見てみましょう。こちらは音が出ます。さて、犬や猫はどう鳴きますか。「犬はワンワン、猫ニャーニャー」ですね。

それでは英語ではどうでしょう。これが、犬はbowwowで、猫はmeowで、日本語とは違うのです。これは何も犬の種類が違うから鳴き方が違うというわけではありません。同じ犬が鳴いていても、このように表記するのです。つまり、日本人は日本語の中で、犬の鳴き声を日本語で再現すればワンワンと鳴くと捉えてきた、そして犬の鳴き声はワンワンだと教えられてきたので、耳の方もそう聞くようになってきたのです。そこで言語が異なれば、再現の仕方が違うということになります。英語以外のいくつかの言語による犬の鳴き声の表記を並べてみますが、こうして他の言語による捉え方を知ってみると、確かにバウワウとか、ガウガウと鳴いているように聞こえる犬もいると思わされます。

中国語	汪汪 (ワンワン)
韓国語	멍멍 (モンモン)
ドイツ語	wauwau (ヴァウヴァウ)
フランス語	ouâ-ouâ (ウアウア)
スペイン語	guau-guau (グEAUグEAU)

これが動物の鳴き声だけでなく、私たちの出す声や音

(キヤーと叫ぶ、くしゃみ、咳など)、それから身の回りの音(ドアが閉まる、時計、プレーキを踏む)など、言語によって、すべて大いにまた微妙に違うのですから、おもしろいものです。そして、同じ鐘でも、カーンと鳴る鐘とゴーンと鳴る鐘では、鐘の厚さが違いますね。こうした違いも、それぞれの言語で存在します。

*星はきらきら

さて、次に「擬態語」の方です。これは音や声はしなないけれど、その感じを捉えて有様や状態を言葉で表現したものです。「星がきらきら輝く」というとき、きらきらという音を出すわけではなく、その瞬きの感じを言葉にしたわけです。「きらきら星」の歌はもとの英語では“Twinkle, twinkle, little star”で、きらきらは英語ではtwinkle twinkleなのがわかります。犬や猫の肉球をぶにぶにというのは、柔らかくて弾力がある感じをうまく捉えてあると思いますが、これは昔からあったのではなく最近よくいわれるようになったものです。ということは自分でも作れるということ、自分語オノマトペを持っている人がいますね。オノマトペ辞典が出ているくらい日本語は擬音語、擬態語の宝庫で、こうした辞典の説明を読んでいると、日本語の中で暮らすことで自分にも結構語感がついているのを発見してなかなかおもしろいものです。

*リンリン、シャンシャン、ジャンジャン……

たいていの詩人はオノマトペに敏感ですが、その中でもEdgar Allan Poeは飛び切りの耳を持っていたといえるでしょう。彼の“The Bells”（鐘のさまざま）は4部に分かれていて、全編オノマトペが散りばめられています。そのIを引用します。ここだけでもすばらしいものです。声に出して詠んでみると、本当に鐘の音が聞こえてくるようです。自分ではちょっとつまりそうで流れるようには詠めないというなら、朗読されているのを是非聴いてみてください。

Hear the sledges with the bells —
Silver bells!

What a world of merriment their melody foretells!
How they tinkle, tinkle, tinkle,
In the icy air of night!
While the stars that oversprinkle
All the Heavens, seem to twinkle
With a crystalline delight;

Keeping time, time, time,
In a sort of Runic rhyme,
To the tintinabulation that so musically wells
From the bells, bells, bells, bells,
Bells, bells, bells —
From the jingling and the tinkling of the bells.

橿さりについたたくさんあの鈴かねの音をお聞き—
銀の鈴だよ!

その音色は、これからの楽しい遊びを告げている!
それが夜の冷たい空気の中なかで
なんとよく響くことよ、りん、りん、りん!
そして夜空には、いっぱいちらばる星々が、
澄みきった喜びに
きらきら光っている!
魔法の呪文に合わせるかのように、
橿から湧き出る鈴の音りん、りん、りに
調子を合わせるように
チカチカチカチカ光っている—
その鈴の音に、鈴の音に、鈴の音に、
鈴のりん、りん、りんの音に
合わせるように

[加島祥造訳]

2) 形に関する技法

refrain (リフレイン、繰り返し)

*リズムに乗って

「リフレイン」は歌の繰り返しとして、おなじみでしょう。詩と歌はつながっているの、詩にリフレインがあることに不思議はありません。つぎのマザー・グースの歌は、小さい子供を膝の上ののせて揺らしてあやす時に歌われるものです。“To market”や“home again”は何度も出てきますし、2行目と4行目は“jig”と“jog”以外全く同じです。他も“to buy”までが同じで、1連目は“a fat pig”と“hog”（どちらもブタで、意味は同じです）、2連目は“a plum cake”と“bun”、そして2連目では“market is late”と“done”とほとんど同じで、だからこそ“jiggetty-jig” “jiggetty-jog”（これは「オノマトペ」と呼ばれるものでしたね）と足取り軽く歩んでいる様子をリズムよく歌えるし、膝の上の赤ちゃんも聞いていて膝の揺れに合わせてリズムに乗って笑い出すことでしょう。それに、全く同じなら退屈してしまうところが、微妙に少し違うところに変化があって楽しくなるのです。

To market, to market, to buy a fat pig;
Home again, home again, jiggetty-jig.
To market, to market, to buy a fat hog;
Home again, home again, jiggetty-jog.

To market, to market, to buy a plum cake;
Home again, home again, market is late.
To market, to market, to buy a plum bun;
Home again, home again, market is done..

市場へ、市場へ、ふとったブタ買いに
おうちへかえろ、おうちへかえろ、てくてくてく
市場へ、市場へ、ふとったブタ買いに
おうちへかえろ、おうちへかえろ、てくてくてく

市場へ、市場へ、プラムケーキ買いに
おうちへかえろ、おうちへかえろ、市場はもうすぐ店
じまい

市場へ、市場へ、プラムパン買いに
おうちへかえろ、おうちへかえろ、市場はおしまい
[河野一郎訳]

*切ないリフレーン

ポップスの歌のリフレーンには、さびともいうべき特に印象的なメロディーがついていて、曲の1番がすんで、2番、3番と進んでいくと、その同じ箇所を心待ちにするほどです。次のErnest Dowsonの“Non sum quails eram bonae sub regno Cynarae”（「我は良きシナラの支配を受けし頃の我にあらずの意のラテン語）のリフレーンもその同じ効果をもっています。中間の2連を割愛しましたが、最終行と最後から3行目の繰り返しは同じです（ただし、最終連では現在形になっているところは注意すべきところ）。シナラと詩人が呼んでいる女性に切ない思いを抱きながら、他の女性とのかりそめの恋におぼれるというなかでの、「自分なりにシナラに忠実だ」という意味深な表明が、繰り返されるので切なさが募ってきます。

Last night, oh yesternight, betwixt her lips and mine
There fell thy shadow, Cynara! Thy breath was shed
Upon my soul between the kisses and the wine;
And I was desolate and sick of an old passion,
Yea, I was desolate and bowed my head:
I have been faithful to thee, Cynara! In my fashion.

(…)

I cried for madder music and for stronger wine,
But when the feast is finished and the lamps expire,
Then falls thy shadow, Cynara! The night is thine;
And I am desolate and sick of an old passion,
Yea hungry for the lips of my desire:
I have been faithful to thee, Cynara! In my fashion.

きのふのこと ああ昨夜よ 女と我の唇の間に
汝の影はさしおりて シナラ 汝の息は
わが魂の上にかかりぬ 接吻と酒の合間に
かくてこの身は愁ひに沈み 昔の恋に胸はふさぎぬ
さなり この身は愁ひに沈み 頭を垂れて
汝を一途に思ひ来たりし シナラよ 我なりに
(中略)

我は叫びぬ 楽の音をいや狂ほしく掻き鳴らせ
強き酒をば注ぎてよ
されど宴は終りを告げ 燈火も消ゆる時
汝の影はさしおりて シナラ 夜は汝のものぞ
かくてこの身は愁ひに沈み 昔の恋に胸はふたがる
さなり 心の願ひの君の唇に飢ゑ
汝を一途に思ひ来たりし シナラよ 我なりに
[南條竹則訳]

*本人に聞くしかない？

以上にあげたようなリフレーンではないのですが、非常に効果的な「繰り返し」の例をRobert Frostの詩で見ましょう。雪の夜、馬に乗って森の中を歩いていくとき、森の美しさにふと立ち止まるのですが、いつまでも見続けるわけにはいかないと、再び歩を進めるといふ、静けさに満ちた詩です。

Stopping by Woods on a Snowy Evening

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village, though;
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer
To stop without a farmhouse near
Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake

To ask if there is some mistake.
The only other sound' s the sweep
Of easy wind and downy flake.

The woods are lovely, dark, and deep
But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep,
And miles to go before I sleep.

雪の夜、森のそばに足をとめて

この森の持主が誰なのか、おおかた見当はついている。
もっとも彼の家は村のなかだから、
わたしがこんなところに足をとめ、彼の森が
雪で一杯になるのを眺めているとは気がつくまい。

小柄なわたしの馬は、近くに農家ひとつないのに、
森と凍った湖のあいだにこうして立ち止まるのを、
変だと思うに違いない——
一年じゅうでいちばん暗いこの晩に。

何かの間違いではないか、そう訊ねようとして、
馬は、馬具につけた鈴をひと振りする。
ほかに聞こえるものといえば、ゆるい風と
綿毛わたげのような雪が、吹き抜けていく音ばかり。

森はまことに美しく、暗く、そして深い。
たがわたしにはまだ、果たすべき約束があり、
眠る前に、何マイルもの道のりがある。
眠る前に、何マイルもの道のりがある。

【川本皓嗣訳】

最後が2度繰り返されているのが印象的です。この詩は脚韻もaaba/bbcb/ccdc/ddddときれいに合って、前の連から次の音をもらって、どんどん進んでいくのですが、最後はddddと同じ音になり最後の2行が全く同じなのでぐっと落ち着き、韻としても強く記憶にとどまるのですが、こうして2行繰り返されたことにどんな意味があるのでしょうか。美しい森を見続けたけれど、人間社会での決まり、約束があるので、それを果たさなければならないという義務感の強さでしょうか。まだまだ眠れないと気が重くなっているのでしょうか。実は、作者は作品を最後どうまとめようかと思って2度繰り返してみたらおさまりが良かったと言っています。なーんだ、そうだったのか、考える

までもなかった、とっていませんか。文学作品は、作者の言うことだけが正解でそれで終わり、というわけではないのです。それなら何事もみな作者に聞かねばなりませんし、作者がもう亡くなっていて、作品について言い残していなかったら、正解が分からないから、その作品についていろいろ考えるのは無意味ということになってしまいます。作者の言葉は、それはそれで参考になりますが、作品は読者が考えたり、感じたりすることによって初めて生きてくるといえるのです。さて、この詩ももとに戻って読み直し、考え直してみましよう。

3) 比喩の技法

simile (直喩) & metaphor (隠喩)

* 「あなたは太陽」 vs. 「あなたは太陽のよう」
どちらも、比喩という点では同じですが、大きな違いもあるのでまとめた方がその違いがわかりやすいかと思えます。つまり、あるもの(A)を別のもの(B)に喩えるという意味では同じなのです。そしてその場合、喩えていることがはっきり分かる言葉「まるで……のよう」「……のごとく」、英語なら、asやlikeが使われていればsimile、使われていなければmetaphorということになります。この二つの用語は日本語では、比喩が直接出ているので前者を「直喩」、後者は隠れているので、「隠喩」と呼びますが、他の呼び方もあるので、次に整理しておきましょう。

simile	直喩、明喩	as, like	[例] A is like B.	A≐B
metaphor	隠喩、暗喩	なし	[例] A is B.	A=B

つまり、「君は花のよう」と言われれば、それはsimile(直喩)で、「君は花だ」と言われれば、metaphor(隠喩)なのですが、どちらを言われた方がうれしいでしょうか。「あなたは太陽のように私を照らしてくれる」を取りますか、それとも「あなたは私にとって太陽そのもの」の方がいいでしょうか。

* 恋人は真っ赤な薔薇

スコットランドの詩人Robert Burnsは、恋人に捧げる愛の詩で、恋人を薔薇やメロディーに喩え、次のように歌っています。

O, my luvè's like a red, red rose,
That's newly sprung in June;
O, my luvè's like the melodie,
That's sweetly play'd in tune.

As fair art thou, my bonnie lass,
 So deep in luv^e am I,
 And I will luv^e thee still, my Dear,
 Till a' the seas gang dry.

Till a' the seas gang dry, my Dear,
 And the rocks melt wi' the sun!
 O I will luv^e thee still, my Dear,
 While the sands o' life shall run.

And fare thee weel, my only Luv^e,
 And fare thee weel a while!
 And I will come again, my Luv^e,
 Though it were ten thousand mile!

俺の恋人よ、お前は赤い薔薇だ、
 六月にぱっと咲いた赤い薔薇だ。
 お前はまるで甘い音楽だ、
 見事に奏でられた甘い音楽だ。

お前の美しさに負けまいと、
 俺の恋も命がけ、おお、俺の可愛い恋人よ！
 いつまでも俺の心は変わりはない、
 たとえ海という海が干上がろうと。

たとえ海という海が干上がろうと、
 たとえ岩という岩が太陽に溶けようと、
 俺の心は変わりはない、いつまでも、
 そうだ、俺の命がある限り、——おお、恋人よ！

さようなら、俺のたった一人の恋人よ、
 ちょっとの間だ、さようなら！
 俺は必ず戻ってくる、おお、俺の恋人よ、
 千里の彼方からでも戻ってくる！

[平井正穂訳]

方言が入っているので、その箇所を、標準の英語に書き直して書き出してみますと、1行目は“my love is like a red, red rose,” 3行目は“my love is like the melody” となります。どちらもlikeがあるのでsimileですね。訳の方は、1行目は原文と違ってmetaphorにしてあることにご注意ください。3行目のほうは、「まるで」が入っていますね。先ほどの「君は花だ」のように、恋人を花に喩えるのはごく普通ではあるの

ですが、それだけにこの詩からは素朴な気持ちが伝わってきますし、少し読みにくくはあるものの、方言だからこそその素朴さが強調されます。それに、詩人は技巧を凝らしていないわけではなく、“red, red”と繰り返して、さらにその[r]の音が次の“rose”とつながって、印象づけています。

*日常生活はmetaphorでいっぱい

ところでsimileとmetaphorについて以上のように説明しましたが、それでも相変わらずややこしいと思われたのではないのでしょうか。実は、日常生活にはmetaphorが知らず知らずのうちに入り込んでいて、私たちにもおなじみのものなのです。「月見うどん」といっても、お月見用のうどんなどあるはずもなく、お月見しながら食べるうどんでもありません。入っている玉子が月のよう、と月に見立てているわけですし、そういえば「目玉焼き」も、焼いた目玉を食べるわけではありませんよね。「恋に燃える心」も、火のように燃えているわけですし、「恋が芽生える」のは草木のようということ。このように、metaphorがごく普通に浸透しているものなら、詩人は、普通はなかなか思いつかない比喩を使って自分独自の世界を作ろうとするものです。最初の表にありますように、A=Bと言い切るので、そうとう大胆な表現ということにもなります。でも、それほどびっくりするような比喩でなくても、味わい深い詩もあります。次のCarl Sandburgの詩“Fog”は、霧がAとすれば、Bは何でしょうか、そしてなぜBに喩えられたのでしょうか。つまり、AとBは、Aの霧は大きくBは小さい、霧は自然現象でBは生物、ということでは全く違うのですが、いくつかの共通点もあります。それは何でしょうか。

Fog

The fog comes
 on little cat feet.
 It sits looking
 over harbor and city
 on silent haunches
 and then moves on.

霧はやってくる、
 小さな猫足で。

そっと腰を下ろして
港と町を
見渡すと、
また静かに歩き出す。

[川本皓嗣訳]

personification (擬人法)

*我輩は猫

擬人、つまり人に擬するとは、人でないものを人のように表現する方法です。英語のpersonificationにもperson (人) という単語が見られますね。夏目漱石の『吾輩は猫である』は、語り手の猫が人間のように全編を語ります。猫や犬といった動物は、人間のように本当に笑うのかと議論されていますが、うれしそうだとか、また悲しそう、怒っているというのはわかります。それで、人間として描かれても、それほど不思議はないのですが、「擬人法」においては、無生物や抽象概念までが人に喩えられます。例えば、ニューヨークにある「自由の女神」は、「自由」という眼には見えないはずの抽象概念が「女神」に喩えられ、彫刻となって見える形が与えられています。裁判所などで見られる「正義」の女神は、目隠しをしてはかりの左右の重さを測っている姿で表されています。

*ぼくは銅線

無生物に擬人法を当てはめた例をCarl Sandburgの詩で見てみましょう。

Under a Telephone Wire

I am a copper wire slung in the air,
Slim against the sun I make not even a clear line of
shadow.
Night and day I keep singing—humming and
thrumming;
It is love and war and money; it is fighting and the
tears, the work and the want,
Death and laughter of men and women passing
through me, carrier of your speech,
In the rain and the wet dripping, in the dawn and
shine drying,
A copper wire.

電信柱の下で

ぼくは空中にかけられた銅線だ。
とても細いので陽光をうけてもはっきりした一線の影
も出来ない。
夜となく昼となくぼくは歌っている——低い鼻唄とな
り爪びきの音となって。

それは恋であり戦いであり、また金なのだ。
それは闘争であり涙であり、労働であり欠乏であり、
ぼくの中を通っていく死であり、また男や女の笑いなの
だ、きみたちの言葉を運びつたえる者、
雨の中では濡れて滴をたらし、あかつきに照れば乾く
この一本の銅線

[安藤一郎訳]

この詩が擬人法を使わず、「空中にかけられた銅線が、夜となく昼となく歌っている」というならどうでしょう。何となく距離が生じ、他人事(ひとごと)のようです。銅線が人間である私たちに直接語りかける形にしてあるからこそ、人間のさまざまな営みが熱く伝わってくると思われませんか。

*お前は秋

擬人法を使った名作にJohn Keatsの“To Autumn” (秋に) があります。秋に歌いかけ秋を歌ったこの詩は、全体が3部に分かれていて、実りの秋がやがて凋落へ、そしてまた次へとつながっていくという大きな流れを描いています。全体にわたって、擬人法が使われていますが、特にその第2部は、秋がthou (二人称単数youの古い形) と呼びかけられて、擬人法が駆使されています。日本でよく歌われる物寂しい秋というより、正に実りの秋。詩の中に出てくる「落穂拾い」は、フランスのミレー作の同名の絵画をすぐに思い浮かべられるでしょう。

Who hath not seen thee oft amid thy store?
Sometimes whoever seeks abroad may find
Thee sitting cureless on a granary floor,
Thy hair soft lifted by the winnowing wind;
Or on a half-reaped furrow sound asleep,
Drowsed with the fume of poppies, while thy
hook
Spares the next swath and all its twined
flowers;
And sometimes like a gleaner thou dost keep

誰が見かけずにいよう 幾度もお前の姿を
 その収穫の ただ中に、
 立ち出でて尋めゆく者は 誰しも見出す折があるろう、
 放念してお前が納屋の床に座りこみ
 脱穀を煽る風に髪を仄かに靡かせているのを。
 または 罌粟の匂いに痴れ 臉も重く、
 刈取る田の中程に眠りこけているのを、お前の
 鎌は
 次の束をからみつく花もろ共
 刈残したまえ。
 また時として 落穂拾いの姿をさながらに 揺ぎなく
 実りを戴く頭をお前は小川の上にさし懸け、
 もしくは 林檎の酒を搾る傍らに佇ち辛抱強く
 滴る雫の絶えるのを幾刻も幾刻も見つめ
 続ける。
 [宮崎雄行訳]

髪を靡かせているという描写からして、秋は明らかに女性と重ね合わされていますが、これをただ「喩えている」と考えて、秋に農婦が収穫の労働に倦みつつも（「眠りこけている」）いそしむところ（「見つめ続ける」）と言い切ってしまうのは面白くないと思われまます。女性でもあるが、秋そのものの姿でもある……「擬人法」という技法のもつ微妙で味わい深い点です。これはあらゆる技法、テクニクにいえることかもしれません。詩人はこの技法を使って詩を書こうというのではなく（そういうこともないわけではないでしょうが）、今この本ではあえてこうして技法を項目別に取り上げていますが、本来技法だけ取り出せるものでもなく、あくまでも作品の内容と分かち難くつながっていて、その中身こそがその形を選ぶということなのでしょう。

4) 単語の並び方に関する技法 oxymoron (オクシモロン、撞着語法)

* オクシモロン??? 撞着語法???

「オクシモロン」というカタカナ語も聞いたことがないし、「撞着」という日本語の方もわけがわからない一と逃げ出してしまわないでください。聞き慣れないカタカナの方は、もともと「鋭い」という意味の「オクシ」と「鈍い、のろまの」の意味の「モロン」というギリシア語を組み合わせでできた単語です。このように正反対の語を組み合わせ、一見矛盾しているように見えて真実を突くのがこの語法です。

* 「急がば回れ」を圧縮すれば?

実例をあげた方が分かりやすいでしょうね。正反対のものが両立するとしたら、それは矛盾で、ありえないということになるでしょう。そもそも「矛盾」という語は中国の『韓非子』に見られ、昔矛と盾を売る商人が「自分の矛はどんな盾でも破ることができ、自分の盾はどんな矛も防げると自慢していたところ、「お前の矛でお前の盾を破ったらどうだ」と言われ、グウの音も出なかったという故事に基いています。オクシモロンはこの微妙な緊張状態を相反する二つの語で表します。そしてこの相反する語が、お互いに反応しあうためには、間に何も入ってはいけないのです。隣接している、背反する語2つ——この条件を満たすと、cruel kindness (残酷な優しさ) がその例ですが、この形容詞+名詞をひっくり返して、kindnessから形容詞を作り、curelから名詞を作り、この二つを組み合わせればもう一つのオクシモロンができます、すなわちkind cruelty (優しい残酷さ) がそれです。また、形容詞二つのオクシモロンもあります。

* 最強のオクシモロンの例

William Shakespeare作*Romeo and Juliet* (ロミオとジュリエット) のジュリエットが恋人のロミオに別れのときに言う台詞にsweet sorrowという、甘い切なさを表現したオクシモロンがあります。これは[s]音の頭韻も踏んでいるというすばらしいものですが、さすがShakespeare、これどころではありません、同じ劇の中、ロミオの台詞でオクシモロン・オン・パレードとでもいうものがあります（出てくるすべてが厳密な意味でのオクシモロンとは限りませんが）。

Why then, O brawling love, O loving hate,
 O anything, of nothing first created!
 O heavy lightness, serious vanity,
 Misshapen chance of well-seeming forms,
 Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health,
 Still waking sleep, that is not what it is!
 This love feel I, that feel no love in this.

何のことはない、ああ、憎みながらの恋、恋ゆえの憎しみ。
 ああ、そもそも無から生まれたもの！
 ああ、憂いに沈む浮気心、深刻な軽薄さ、
 形の整ったものの中のゆがんだ混沌！
 鉛の羽根、明るい煙、冷たい炎、病んだ健康、
 眠りとも呼べない醒めた安眠！

恋をしながら少しも楽しめない。

[松岡和子訳]

これは、1幕1場で、まだロミオがジュリエットに出会う前、別の女性に片思いをしているとき、その苦しい胸の内を何とか言葉にしようとしたものですが、定めがたいそのもやもやした思いは、オクシモロンの連発でしか表現できなかったのでしょう。まだこの時は恋に恋するという状態で、その後ジュリエットに出会って一直線に恋に向かっていくところと対比されています。

5) 内容に関する技法

hyperbole (誇張法)

*眼が点

日常生活でも、「死ぬほどびっくりした」とか「眼が点になった」などという大げさな言い方をします。話を面白くしようと多少(時には大いに)大きなことを言ってみたりします。詩人がこの手を使わないはずがありません。中国でも、「白髪三千丈」と昔から大げさに誇張していました。Simile(直喩)の項目で例としてあげたBurnsの詩では「いつまでも俺の心は変わりはない、たとえ海という海が干上がろうと。……たとえ岩という岩が太陽に溶けようと」と、歌っていました。人は恋をするとhyperboleを使いたくなるものようです。

*三万年も(!)恋人を誉め続ける

恋人に宛てた他の詩の例を見ましょう。よくぞこれだけhyperboleを並べたと思わずにいられないほど圧倒的なAndrew Marvellの“To His Coy Mistress”(含羞む恋人へ)です。

Had we but world enough, and time,
This coyness, Lady, were no crime.
We would sit down think which way
To walk and pass our long love's day.
Thou by the Indian Ganges' side
Shouldst rubies find: I by the tide
Of Humber would complain. I would
Love you ten years before the Flood,
And you should, if you please, refuse
Till the conversion of Jews.
My vegetable love should grow
Vaster than empires, and more slow;

An hundred years should go to praise
Thine eyes and on thy forehead gaze;
Two hundred to adore each breast;
But thirty thousand to the rest;
An age at least to every part,
And the last age should show your heart;
For, Lady, you deserve this state,
Nor would I love at lower rate.

恋人よ、もし僕たちにあり余るほどの広い世界と時間
が
ありさえしたら、君のその含羞^{はにか}みも罪には当たるま
い。

二人で腰をおろし、そぞろ歩きの道をあれこれと思案
し、

終日^{ひねもす}恋の語らいに時を過ごすのもいいかもしれぬ。

君がインドのガンジス河の辺りでルビーを探すという
のなら、
僕は僕でハンバー河の辺りで纏々^{つづ}恋の恨みを眩^つくだけ
の話だ。

僕がノアの洪水の十年も前から恋を訴え続けていたと
しても、

君がどうしても嫌だというのなら、それこそ、
ユダヤ人の改宗の日まで、未来永劫^{みらいえいこう}、

僕を拒み続けても、それはそれで仕方のないことだ。
僕の恋は、いわばすすくすくとのびる草木のようなもの、

どんな大帝国よりも大きく、そしてゆっくり成長
する力をもっている。

君の眼を称え、君の額を誉めるのに、
百年かかってもいい、そして、君の二つの乳房を
讚美するのに、それぞれ二百年はかけてもいいと思っ
ている。

だが、他のところには全部で三万年はかかるかもしれ
ぬ。

つまり、どの部分にも、少なくとも帝国興亡の一時代
はかかり、
君の心を見極める頃には、最後の審判がくるというわ
けだ。

恋人よ、君という人はそれだけの礼を尽くすに値する
人なんだ、
いい加減に口説いたら申し訳がたたぬというものなん
だ。

[平井正穂訳]

ハンバー河は、この詩人の故郷の川で、そこからインドのガンジスは遥かに遠く、空間的にこの地球上での最高の広がりを示しているといつていいでしょう。ノア方舟は『旧約聖書』に出てくる昔々の出来事、そしてユダヤ人がユダヤ教からキリスト教に改宗するというのはほとんどありえない話で、それこそ永遠の果て——従ってノアから改宗までの時間の長さというのがどれほどのものか、それでも恥ずかしいというならそれだけ待ってもいいというのです。そして、三万年かけて誉め称えて、そして、どうしようというのでしょうか。実はこの詩は後半があります——でも、時間が無い、だから、今抱き合ひましょう、というのです。前半でこれほど技巧を凝らしたのですから、この後半の口説きも実に巧妙、是非本で探して読んでみてください。

*hyperboleの詩人

アメリカ合衆国は、ヨーロッパから移民が定着してから発展したわけですから、最初は、ヨーロッパの模倣や亜流であるという面が強かったのですが、次第に独自の世界を作ることとなり、詩もその例にもれません。そういう新たに発見されたアメリカらしい力強さに満ちた詩を書いたのがWalt Whitmanです。例えば、“Song of Myself”は全編、自己肯定のhyperboleといつてもいいのですが、“Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,” (ウォルト・ホイットマン、一個の宇宙、マンハッタンの子)で始まる第24節から少し引用してみます。

Divine am I in side and out, and I make holy whatever I touch or am touch'd from,
The scent of these arm-pits aroma finer than prayer,
This head more than churches, bibles, and all the creeds.

神聖だ、ぼくは内も外も、そして触れるもの、触れられるものを何もかも神聖にする、
この腋の下の匂いは祈りよりもかぐわしい、
この頭は教会、聖書、すべての教義にまさる。

[亀井俊介訳]

understatement (控え目な表現)

[上の項目hyperboleに対するlitotesやmeiosis (いずれも緩叙法) という修辞学上の言葉もありますが、あまり使われないので、普通に使われる言葉で項目を立て

ました]

*謙遜しても実は……

上記hyperboleの反対で、控え目にいうことでかえって印象を強める技法です。これも日常でもしばしば使われ、「まあまあ出来だった」と表現しても、実は非常にうまくいったといった場合がそれです。おとなしい人が後で深い印象を残していたりしますよね。

*訳せないくらい(?)意味深いunderstatement

William Wordsworthには、Lucy Poemsとしてまとめられたいくつかの詩があり、いずれもLucyと名付けられた女性が扱われています。このLucyとは誰か、いろいろ議論されてきましたが、答えはないといつてもよく、要するに詩人にとって非常に大切な女性ということとはまちがいありません。控え目なこの女性のこと、また彼女が亡くなったことを描いた次の詩は、最後が見事なunderstatementとなっています。

She dwelt among the untrodden ways
Beside the springs of Dove,
A Maid whom there were none to praise
And very few to love.

A violet by a mossy stone
Half hidden from the eye!
—Fair as a star, when only one
Is shining in the sky.

She lived unknown, and few could know
When Lucy ceased to be;
But she is in her grave, and oh,
The difference to me!

その女は人里離れて暮らした
鳩という名の流れの水源に近く。
その女を褒めそやす人はなく
愛する人ととも数少なく。

苔むす岩かげの堇のごとく
人の目につくこともなく。
——星のごとくに麗しく、ただ一つ
輝く星のごとくに。

人知れず暮らし、知る人ぞ知る、

ルーシーが逝^いったのはいつ。
地下に眠るルーシー、ああ、
かけがえのないルーシー。

[山内久明訳]

最終行は、原文に忠実に訳せば、「私にとっての（彼女が生きていた時と、亡くなったあとの今との）違い」ということになるでしょう。“The difference”（違い）というだけで、悲しい感情は直接歌われていません。その喪失感、どんな形容詞も拒否するもので、ただ「違い」とだけあって、読者がどのような違いなのかさまざまに深く忖度することになります。大げさに感情を表出して泣き叫んだりしていないので、感情は浅いのかといえば、とんでもない、この“The difference”という言葉が重く迫ってきます。この最後の1行は「何という違いか」というふうに訳されることもあります。しかし、「何という」がつくとそこに感情が入るので、「違い」という言葉が軽くなってしまいます。上にあげた訳を見てみましょう。もう、全く別の言葉が使われていますね。原文のunderstatementの精神を何とか日本語にしてみたということでしょうか。逆に、原文のunderstatementが如何に効果的かを示しているともいえるでしょう。

irony (アイロニー)

*知らぬは若妻ばかりなり

日常生活においては、ironyは「皮肉」、また言葉に関わるだけの時は「反語」と訳されていますが、詩の技法としては当てはまらないので、そのまま「アイロニー」とされます。まず、例を見ましょう。Thomas Hardyの作品で、彼はこの詩を”Satires of Circumstance”（人間状況の風刺）という作品群の中に入れていますが、このように、アイロニーは風刺するときによく使われる手段です。

At Tea

The kettle descants in a cosy drone,
And the young wife looks in her husband's face,
And then at her guest's, and shows in her own
Her sense that she fills an envied place;
And the visiting lady is all abloom,
And says there was never so sweet a room.

And the happy young housewife does not know

That the woman beside her was first his choice,
Till the fates ordained it could not be so...
Betraying nothing in look or voice
The guest sits smiling and sips her tea.
And he throws her a stray glance yearningly.

茶を飲みながら

湯わかしが気持ちのよい低音で伴奏する室内で
若妻は夫の顔をのぞきこみ、自分が招いた
女客の顔を見る。そして自分自身の顔のなかに
自分は羨まれている地位にあるとの満足感を露わにする

訪ねてきた貴婦人は花咲くような表情で
こんなすてきなお部屋は見たこともないと世辞を言う

幸福な若妻は知らない

自分の隣にいるこの客は夫が最初に選んだ女で運命の
定めによって、やがてそれが実を結ばなかったこと
を・・・

客は表情にも声のなかにも何一つ隠し事を漏らすこと
なく

にこやかな顔をして座ってお茶をすすっている

夫は思慕をこめたまなざしを ちらちらと客に投げか
ける

[森崎健介訳]

ちょっと出来すぎているくらい、アイロニーにそのもののような状況です。知れば今の満足感は粉々に砕けるのに、知らないからこそ満足している——つまり、この優越感に裏打ちされた幸福は表だけで、実は自分こそ見下される不幸な状態にあるのです。このように、アイロニーはその本来の意味とは全く逆の言葉遣いや表現をすることをいいます。日常でも、レストランで食事をしてまずかったときに、「いやー、これがおしくてね」と皮肉たっぷりに言うことがあります。つまり「まずい」というのが本来の意味なのに、逆に「おいしい」と表現するのがアイロニーです。さて、詩に戻ると、夫と客の女性は知っているのに、若妻だけが知らないのが、アイロニーはいっそう高まります。もちろん、作者も読者も知っているのです。こうした状況はお芝居でもよく使われます。観客は分かっているのに、登場人物は知らない——というところから、こうしたアイロニーはdramatic irony（劇的アイロニー）と呼ばれます。

*アイロニーが何重も

全く逆というのは効果も大きいし、かつまた人生というのはアイロニーに満ち満ちているので、詩人はアイロニーを効かせた詩に卓越していて、深く微妙なアイロニーの詩が数多く書かれています。その中に、非常に壮大で複雑なアイロニーを描いたPercy Bysshe Shelleyの名作があります。

Ozymandias

I met a traveler from an antique land
Who said: Two vast and trunkless legs of stone
Stand in the desert …Near them, on the sand,
Half sunk, a shattered visage lies, whose frown,
And wrinkled lip, and sneer of cold command,
Tell that its sculptor well those passions read
Which yet survive, stamped on these lifeless things,
The hand that mocked them, and the heart that fed:
And on the pedestal these words appear:
‘My name is Ozymandias, king of kings:
Look on my works, ye mighty, and despair!’
Nothing beside remains. Round the decay
Of that colossal wreck, boundless and bare
The lone and level sands stretch far away.

いにしえに栄えた地から来た旅人に会った。
旅人は言った。胴体のない巨大な石の脚が2本
砂漠に立っていた……その近く、砂に
半分埋もれて、砕けた顔があった、しかめ面、
皺のある唇、そして冷酷な有無を言わさぬ冷笑は、
この像を刻んだ石工が、情念をうまく読みこんだこと
を物語る。

情念は、この息吹のない物体に刻まれて生き続ける。
この情念を写し描いた手と、その情念を育んだ心より
長く。

台座にあるのはこの言葉、
「私の名はオジマンディアス、王の中の王。
私の仕事をよく見給え、汝ら力ある者、そして絶望す
るがいい！」

他には何も残っていない、巨大な残骸の
骸の周りに、果てしなく、何もなく
寂しく、平坦な砂漠が遥かに広がっていると。

[岡村眞紀子訳]

Ozymandiasとは古代エジプトの王ラムセス二世のギリ

シア名で、テーベにあった彼の像が大英博物館で公開された時に、美しさ感激したShelleyがこの詩を書いたといわれています。その像にはありませんが、エジプトにある像には実際に前半はこれと同じ碑文が入っているとのこと。この詩で描かれているのは、王は死んでも、彼のメッセージは石工の刻んだ碑文として残った、王の偉業は残らず石工の作品である像は残った、しかし石工の名は残らず王の名は残った——という何重ものアイロニーに満ちた状況です。そして、最後にそのすべてを包む大きなアイロニーがあります。この像は、残骸としてあり、やがては無に帰するであろうという虚無感です。ただし「無に帰する」とは表明していないところに、このアイロニーの深さがあります。碑文の“despair”（絶望するがいい）という言葉が、全編読み終わった最後に、王の意図したのとは違った意味で響いてきます。そういうアイロニーもこめられているのです。

注記

この他に、詩の技法として、allegory、symbol、conceit、transferred epithetなどあるが、紙面の都合もあり、今回はひとまず、ここで置くことにする。

参考文献

個々の事例に関して——言及された順にあげる

河野一郎編訳『対訳英米童謡集』（岩波書店、1998）

西前美巳編『対訳テニスン詩集』（岩波書店、2003）

加島祥造編『対訳ポー詩集』（岩波書店、1997）

南條竹則編訳『アーネスト・ダウソン作品集』（岩波書店、2007）

亀井俊介・川本皓嗣編『アメリカ名詩選』（岩波書店、1993）

平井正穂編『イギリス名詩選』（岩波書店、1990）

サンドバーグ作 安藤一郎訳『シカゴ詩集』（岩波書店、1993）

宮崎雄行編『キーツ詩集』（岩波書店、2005）

松岡和子訳『シェイクスピア全集2 ロミオとジュリエット』（筑摩書房、2008）

山内久明編『ワーズワス詩集』（岩波書店、1998）

森松健介訳『トマス・ハーディ全詩集』（中央大学出版部、1995）

桂文子・岡村眞紀子・武田雅子共著『ソネット選集—サウジーからシンバーンまで—』（英宝社、2004）

**Let's Have Some Poetry
-in English! — Various Techniques of Poetry**

Osaka Shoin Women's University Faculty of Liberal Arts Department of English as an International Language
Masako TAKEDA

Abstract

This is part of “An introduction to English Poetry” and a sequel to the previous paper titled, “Let's Have Some Poetry in English -Various Forms of Poetry-,” published in Osaka Shoin Joshidai Ronshu Vol.47 (2010). This time, various techniques of poetry are treated. They are classified into five different aspects as sound, form, figurative expressions, arrangement of words and contents. The sound section covers alliteration and onomatopoeia; the form section covers refrain; the figurative expressions cover simile and metaphor contrasted and personification; the arrangement of words covers oxymoron; and the last one, contents, covers hyperbole and understatement contrasted and finally irony. All the items are first defined, then explained with sampler poems, clarifying how these techniques are embodied in each work, enriching and enhancing the charm of poetry. Since several poems are provided in explaining each item, these techniques can be apprehended from different points of view, thus, allowing the readers to get a deeper idea of what poetry is. All in all, what is aimed for is learning not only techniques per se, but also how to appreciate poetry, or works of literature.

Keywords: alliteration, onomatopoeia, simile, metaphor, irony